

文化を継承する

園長 児嶋 草次郎

今年は暖冬になるのでしょうか。毎年11月23日の収穫感謝祭前後に、この茶臼原には霜が下りるのですが、12月に入って、まだ秋の花が咲きほこっています（5日現在）。特にフヨウの花は元気で、緑の大きな葉の先にポンポンのようなピンク色の八重花を、次から次に咲かせ、友愛園周辺を占拠したような雰囲気を作っています。挿し木で増やした株も随分増えました。この木の皮からは繊維が取れ、将来「紙漉（かみす）き」をやることも想定して、増やしているのです。

さて、11月には、コロナも比較的落ち着いた状況の中で、「友愛のルーツを捜す旅」と銘打った友愛園職員の研修旅行（2泊3日）を2回に分けて行いました。Aグループが11月7日から9日にかけて、Bグループは11月28日から30日。私は案内役としてどちらにも参加し、一人ひとりの職員ができるだけ充実した研修が行われるように助言・指導を行いました。こうして、職員たちと一緒に岡山を訪れるのは5年ぶりです（高校生たちとは、3年に1回は訪れています）。

石井記念友愛社は、戦後すぐ昭和20年のスタートですが、その理念は、岡山孤児院の「天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ相愛すべきこと」を引き継いでおり、最近では、その精神・文化を継承していると紹介されても否定しないようにしています。しかし、ここで働く職員たちは、2年3年と経つうちに少しずつ入れかわっていきます。そのルーツを互いに確認し合うことは、定期的必要でしょう。そうしないと、言葉だけが一人歩きするようになり、形骸化していきます。この3年、コロナ感染症対応で職員たちも随分ストレスを溜めこんでいるし、時期としてはちょうど良かったのかもしれない。

子供たちが登校した後、朝8時前後に資料館駐車場から、それぞれ20名弱で、「明倫観光バス」を雇ってスタート。5年前は友愛社の保育園や後援会の方々も誘いましたが、コロナ渦中でもあり、人数をしばりました。

出発して間もなく、2回とも予告なく、私は職員たちに対して三つの課題を設定しました。この研修旅行に、互いに物見遊山の観光気分にならず緊張感を持って望むためです。以下だいたい次のような話をしました。

今回初めて「友愛のルーツを捜す旅」に参加する職員もいますが、研修中ずっと頭の中においてほしい三つの課題を出します。

- ①石井十次は、なぜ施設を岡山から宮崎に移したのか。
- ②石井十次は大正3年亡くなる前、職員たちや卒園生たち・子供たちを枕元に呼び集め、一人ひとりが石井十次になって志を引き継いでほしい旨のことを言い残したとされています。皆さんは御縁があって現在石井記念友愛社で働いているのですが、その言葉を皆さんはどう受け止めるか。
- ③石井十次、大原孫三郎、児島虎次郎、三人の友情はどのようなものであったのか。それぞれどう考えるのか。

以上3点ですが、ヒントになる話を20分程度しました。

①岡山孤児院当時、岡山市内には約4ヘクタールの広さの敷地に、何十棟もの当時としては立派な園舎が建ち並んでいました。一方、石井は子供の成長にとって豊かな自然が必要だと考えていました。大自然に囲まれ、日常生活の中の、草木・大地との触れ合いが子供たちの人間としての成長になくはないものと考えたようです。そう思う一つのきっかけになったものは、ルソーの「エミール」でした。ルソーの思想を教育の世界で具現化しようとしたのがペスタロッチでしょうけど、石井十次も同じ感性を持っていたのだと思います。

多くの園舎を解体し、船で岡山から宮崎茶臼原に運びました。職員や子供たちも船で移送しました。多くの資金を必要とするし、多くの犠牲をとまうことにもなりました。それでも決行したのは、その行動が未来につながる投資だ、未来の子供たちをも救う行動だと考えたのだと思います。現在の自分たちのことしか考えなかったら、何もせず、現在の生活をそのまま維持する方が楽です。未来を考えなかったら、人間冒険はしません。その未来の先に現在私たちがいます。

②石井十次が亡くなったのは大正3年です。それから12年間は施設は何とか続けましたが、大正15年、岡山（茶臼原）孤児院は解散してしまいました。それから20年間閉鎖状態が続きました。そして、日本が太平洋戦争に負けて戦災孤児が生み出され、その子供たちを救済することを目的に、私の父児嶋琥一郎が柿原政一郎さんの支援を受けて事業を再開しました。名前も石井記念友愛社と変えました。

事業を再開したと聞けばかっこよく聞こえますが、残っていた建物は静養館、方舟館、それに倉庫だけ。琥一郎は虎次郎の息子として岡山で育っていますので、言わば福祉のことも茶臼原のことも何も知りません。そこには、5人前後の地域に自立できない知的障がい者と、世話をする高齢の職員数名だけが残っていました。

イメージしてほしいのですが、一つの施設を閉鎖して20年間放置したら、どうなるのか。畑は完全に山にもどってしまうでしょう。人がいなくなれば、教育やその基盤となる文化を維持していくことはできません。文化はどんどん風化し、消滅していきます。普通、一度つぶれたものが20年も経って再生するなんてことはあり得ない。再生したとしても、全く別のものができる可能性がある。ではなぜ現在の石井記念友愛社として復興させることができたのか。石井記念友愛社のある地域には、石井十次に直接学んだ人たちが何十軒か農家として独立し、農業を営んでおられました。ここがポイントになります。

『一人ひとりが石井十次になって志を引き継いで』といった石井十次の言葉が、聞いた人々の心の中に生き続けていたのではないか。石井十次がそれをねらったのかは分かりませんが、その言葉の中に、継承のしかけが隠されていたのではないか。一度は閉鎖したかもしれないけど、その言葉がDNAとなって柿原さんを初めこの地域の人々の中に生き続け、戦後の数十年間、再生するエネルギーとなったのだと、私は最近思うようになってきました。ここにいる職員の皆さんも縁があつて友愛社で働くようになったのですが、その延長線上にいる。つまり、その言葉を背負う立場にいるということになると思います。

③石井十次、大原孫三郎、児島虎次郎間の友情とは、どのようなものであったのか。石井家は最下層の武士であり、財産家ではありません。医学校時代もお金には苦勞しています。宮崎の医師荻原さんにお金を出してもらったり、医学校の校長宅に居候させてもらったりしています。苦学生であり、人の子を世話するような余裕はなく、ギリギリの生活です。虎次郎も、苦学生で、大原家から奨学金をいただいています。

石井十次はその後、お金はなくても、大事業をやることができた。それは、人の和・輪・環を作

ることができたからだと思います。人の和はどうやったらできていくのか、職員の立場で考えてみてほしい。人間が一人でできることは限られている。和が成りたった時、職員レベルで言うならば、チームワークが成り立った時、事業は発展していくのだと思います。

時代が変わり、石井記念友愛社になっても、施設を増やすことができます。現在、職員と利用者的人数を合わせるならば、岡山孤児院の一番多い時代と変わらない。大原美術館も倉敷中央病院も、規模は一段上だけど、どんどん進化・発展・増殖している。その原点は、石井、大原、児島の友情から出発しているのです。

以上のような話を、マイクを握りながら長々とさせていただきました。私も70歳を過ぎて、「一期一会」じゃないですが、この研修旅行が、もしかしたら私に与えられた最後のチャンスになるのかもしれないという思いもあり、伝えるべきことを伝えておこうと考えました。後は、それぞれの職員の判断です。

高速道を北上し、11時半頃大分県臼杵港からフェリーに乗り、四国の八幡浜港に午後2時前着。そして、いくつかトンネルをくぐり抜けると、またひたすら、瀬戸内海を左に見下しながら高速道を北上。瀬戸内海には靄（もや）がかかり、右手の山々は常緑樹と落葉樹の混合林が多く、まだハゼの紅葉やクサギやニレ科植物の黄葉を楽しむこともできました。瀬戸大橋を渡り、岡山駅前のホテルに着いた頃は、あたりも暗く夕方6時過ぎでした。

2日目がいよいよ視察研修です。まず岡山孤児院のあった「三友寺」。住職の勘藤晋御夫妻自らお出迎えいただきました。住所は、岡山孤児院時代と変わらず門田屋敷。三友寺を中心にしてこのあたりの一画、4ヘクタールほどに園舎が何十棟と建ち並び、一つの村を形成していました。今は、すっかり住宅地になってしまっており、昔の写真を見てなかったら、当時をイメージすることはできないでしょう。岡山孤児院の跡地を証明するものは、奥まった所の墓地の中にある「岡山孤児院祈禱場」と彫られた小さな円柱の石碑だけですので、無理をしても、その場に立つことをお願いしないわけにはいきません。お許しいただいた勘藤様、ありがとうございました。

次に上阿知村の診療所跡地です。この10数年、貸切りバスで訪れることができるようになり、この地は、岡山孤児院発祥の地として位置づけるようになりました。バスの中で「ただ最初の救済児と出会った場所」だけではなく、石井十次が村の人たちにあたたく受入れていただき、癒され余裕を取り戻すことのできた場所でもあり、故郷の生家のある馬場原周辺の雰囲気にも似ていますので、感じ取ってください、と事前説明しておきました。春の高校生自覚旅行の時もそうでしたが、「石井十次に学ぶ会」の東森貢・二三子様、馬場英子様、合わせて7、8名の方々が迎えてくださいました。会長の東森様に御挨拶していただき、馬場様より、石井十次がここで立ち直り、貧しい母子と出会った時の話をしてくださいました。現地の人の話は、若い職員たちの心にしみこんだと思います。今回初めて知ったことですが、海まで3Kくらいとのこと。ますます高鍋の馬場原と似ていると感じるようになりました。

倉敷中央病院（公益財団法人）では、広いホールで常務理事の富田秀男様より直接、その理念・歴史事業等について説明がありました。もともと紡績会社の職員のために設立されたものですが、今や医師の数だけでも550人以上、総職員数は3800人だそうです。「病院の中に街がある」、職員たちにはそんな説明をしてきましたが、今回、病院の職員に案内され病院内を急ぎ足で回りながら、巨大な恐竜の体中を歩き回っているような、そんな気分にもなりました。来るたびに進化・増殖しており、これ以上どこまで発展していくのだろうと想いました。

最後は大原美術館です。ここでも最初に別館で学芸員よりその成り立ち等について説明していた

できました。美術館という福祉とは異質の空間で、しかも岡山倉敷で、石井十次や児島虎次郎の業績の話を第三者から聞くというのは、若い職員たちにとっては、より真実味が感じられ感服し、身近な存在として受け取れるようです。御迷惑はおかけしますが、今後もお願いしていこうと思います。その後、それぞれのペースでゆっくりと絵画を鑑賞し、漆喰（しっくい）・瓦屋根の「美観地区」と言われる町を散策しました。観光客も随分もどって来ていて、美術館周辺も大いににぎわっていました。大原孫三郎と児島虎次郎との友情から出発した絵画収集が、こうして倉敷という街の発展に大きく寄与しているのだと実感しながら、私もこの100年の時の流れを吸い取るような気分で、町を歩き回りました。

29日のことですが、朝から研修に参加された福岡県立大学の田代英美さん、佐藤繁美さんから電話が入り、大原孫三郎の生家旧大原家住宅にも私だけ入ることができました。現在「語らい座大原本邸」として公開されているのです。お二人は、大原研究者でもあり、先に入られ館長の山下陽子さんと語っておられたのです。私がここに入るのは、大原謙一郎さんに御挨拶するために兄に連れられて来た時以来2度目だと思います。山下氏に御挨拶し、大きな蔵を改造した大原総一郎氏の蔵書の並ぶカフェで、おいしいコーヒーをいただくことができました。ありがとうございました。

3日目は、園にもどるために、また一日がかりの大移動でした。やはり岡山は遠い。遠い故郷九州に、リスクを犯してでも帰ろうとした石井十次の思いに、それぞれの職員が自らを重ねた旅になったと思います。

若い職員の研修レポートからいくつかを拾ってみます。

「十次が開拓したこの地で十次の志を引き継ぎ、また未来を見据えた救済事業を、次は私たちが今後の未来の為に継承していきたい。一人の力だけでなく、友愛園というチームで子供たちの未来を背負っていきたくて強く思えた2泊3日でした。」（早田喜良楽）

「十次先生がなぜ茶臼原に孤児院を移転したのか、研修中ずっと考えましたが、『自然主義』の理念から子どもたちを自然豊かな場所で育てたいという信念があったからだと思うのが一つ。もう一つは、大師堂での馬場原の風情を感じられたことが心を癒すことになったのではという話を聞いた時から、十次先生の心の中に深い郷土愛と郷愁の念があったからではないかと思えてきました。」

（古屋智也）

「祖父は石井十次と一緒に生活していた。きっと石井十次の言葉を聞いていたのではないか。祖父に聞いたことはないが、自然の中で生活して、みんな協力し合いながら困っている人を助けていたのかなと思った。野菜やほうき、遊び道具など、自分が小さい頃よく作ってくれていた。祖父はあまりしゃべるほうではなかったの、苦労したとか聞いたことはなかった。自分も苦労を苦労と思わず、プラス思考で頑張りたいと思った。」（岩倉百合子）

「自然が多い場所は他の県や地域にもあるはずですが、その中でも今のこの場所が最適だと考え、現代に受け継がれ、今も茶臼原に堂々と建っていることはあたり前ではなく、石井十次の意思をしっかりと受け継いできた方たちがいてこそ今であるとも思います。私は大学時代、教育学部で学んできたので、ルソーのエミールやペスタロッチについて何度もディスカッションやプレゼンテーションした事を思い出しました。ペスタロッチが言われた“生活が陶冶する”、生活そのものの中で人は学び、人格形成していく、というのは、本当に友愛園の生活が体現しているものに近いと感じます。」

（村田ななみ）